

序 文

本書は、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）研究員による研究成果報告論集である。

本センターは、私立大学研究ブランディング事業として、2017年11月に採択され、人と世界に開かれたデジタルアーカイブの構築とその活用を目標とする研究組織である。

より開かれた研究環境を構築すべく、本センターは、学内外の研究者から構成され、4つのユニットならびにパイロットユニットとして、それぞれ東西文化接触とテキスト、東アジアの中の大阪の学統とネットワーク、古都・史跡の時空間、古典籍資料の情報資源化、アジア映像、劇場文化研究など多彩な研究テーマを掲げ活動を行ってきた。

本論集には、デジタル・ヒューマニティーズの手法を活用した言語、思想、歴史等に関する論考が28篇収録されており、本センターのメンバーによる研究成果の一端が反映されている。

関西大学はここ十年ほど前から、「東アジア文化交渉学」という新たな学問体系を提唱しており、文化交渉の観点を取り入れながら、東西学術研究所の研究課題である「東西両洋文化の比較研究」の中核をなすアジア文化の研究に研鑽を重ねてきた。研究ブランディング事業が採択されてから、さらに「デジタル技術に裏打ちされた東アジア研究のオープン・プラットフォーム」の形成を協力を進めてきた。

5ヵ年計画としてスタートした本プロジェクトは、本年度を以て一旦の区切りを迎えるが、これはあくまでも通過点であって、終点ではない。私たちは、「特色ある共同利用・共同研究拠点」として申請することを決定した。申請中の研究拠点は、関西大学の強みである中国学を核とした東洋学に、デジタル・ヒューマニティーズの導入と定着を促進し、我が国における東洋学の新たな発展のための学術基盤を形成することを目的とする。中国学・東洋学の研究リソースをデジタル化された形で提供し続け、それらを活用したデジタル・ヒューマニティーズのさまざまな研究モデルを継続的に発信し続ける次の時代の研究センターを目指す所存である。

5年間の研究成果を世に問う本書が、関心を持つ方々に迎えられ、大いに活用されることを期待すると共に、デジタル・ヒューマニティーズによるアジア研究をいっそ推進していくことができれば幸甚である。

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長

沈 国 威

2022年3月吉日